

# 琴ノ尾岳公園造成に伴う琴ノ尾岳 烽火台跡緊急整備発掘調査報告書

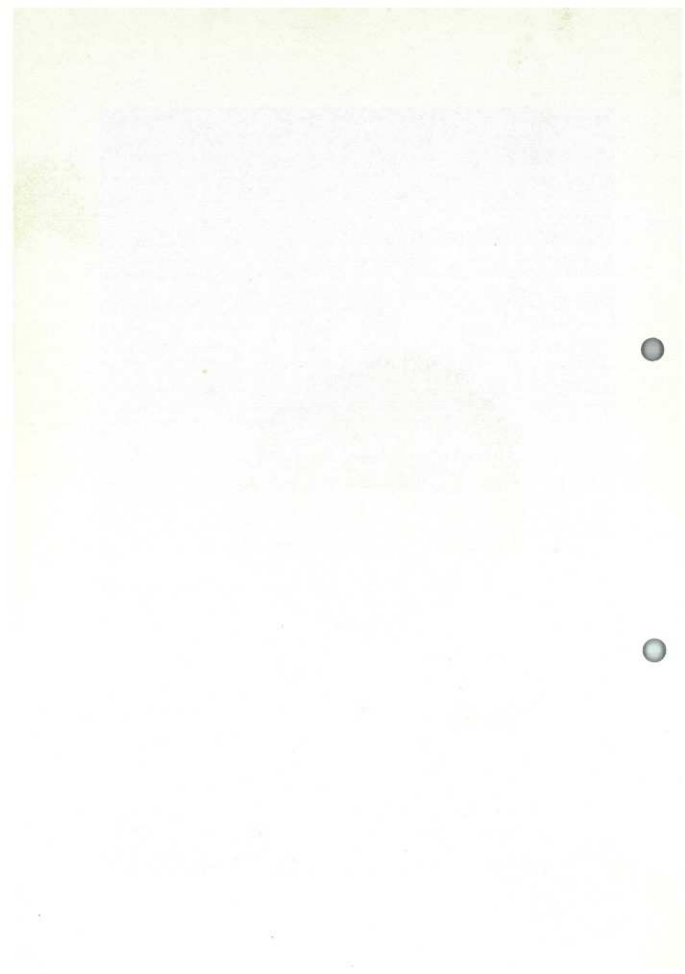


1989

長崎県多良見町教育委員会

新編 琴子村町和堂園地高引ノ事  
明治四十四年四月廿九日





## 発刊にあたって

このたび、琴ノ尾岳烽火台跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

本遺跡は、大村湾県立公園に包含される琴ノ尾岳公園の中にありますが、今日では遺跡の直近に大パラボラアンテナ群が建てられ、現代と中・近世の通信施設の対比がさまざまな感慨を呼び起こします。

この遺跡については、『大村藩郷村記』に次のように記されています。

「壹岐力村琴の諸嶽の半腹に狼煙臺の跡あり、古来より長崎異変の節、長崎烽火山の狼煙、この嶽にて請つぎ、平戸鐘崎へ通報をする定めなり……」と。

長崎県南部全域を眺望できるこの地は、通信の中継点としては最適の地であり、大村藩玖島城も眼下に見えることから烽火台が設けられたと思われまふ。

1808年イギリス軍艦フェートン号がオランダ国旗を掲げて長崎港に不法侵入し、薪・水・食糧等を強要し幕府の肝を冷させた、いわゆる「フェートン号事件」を契機に、烽火台の見直しがなされた。

しかし、「雲霧深い時は狼煙が不分明」であるという理由で、文化6年(1809)以後は廃止され、飛脚による通報にしたとあります。

ともあれ、本遺跡の発掘調査及び復元、報告書の発刊につきまして、長崎県文化課の全面的なご指導をいただきましたこと、また炎天下に作業に従事していただきました皆様方に衷心より感謝申し上げ、発刊の言葉といたします。

平成元年3月31日

多良見町教育長 長野 崇

1. The first part of the report is devoted to a general

description of the work done during the year.

2. The second part is a detailed account of the

work done in the various departments.

3. The third part is a summary of the results

obtained during the year.

4. The fourth part is a list of the publications

issued during the year.

5. The fifth part is a list of the names of the

members of the staff.

## 例 言

1. 本書は、長崎県西彼杵郡多良見町佐瀬郷字竹野山1787-106 他に所在する琴ノ尾岳烽火台跡緊急整備発掘調査である。
2. 調査は、多良見町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、多良見町教育委員会を主体とし、長崎県文化課が協力して行った。
4. 本書の図版は町田が作成し、トレースには烽火台平面・断面を浦田、外郭部を伴耕一朗、地形図及び藩政時代の大村藩の地図を黒川によった。また、沈線のある石材実測を古閑に依頼した。
5. 本書の執筆・写真撮影及び編集は、町田が行った。
6. 本遺跡に関する図面及び写真類は、長崎県文化課が保管の任にあっている。
7. 調査期間は、昭和62年7月18日～8月22日に実施した。
8. 復元整備を昭和62年10月5日～10月7日に実施した。
9. 調査関係者

多良見町教育委員会	長野 崇	教育長
	藍山 勇	事務局長
	佐藤 徹郎	派遣社教主事
	櫻山 洋次	社会教育係
	小林真由美	社会教育係
(調査担当)	吉田 幸英	社会教育係長

多良見町役場 (産業振興課)

山下 勇	課長
田崎智恵雄	課長補佐
高柳 広行	水産商工係

長崎県教育庁文化課	田川 肇	調査係長
(調査担当)	町田 利幸	文化財保護主事

(調査担当)	浦田 和彦	文化財研究員 (現県立老岐高等学校教諭)
--------	-------	----------------------

発掘調査外業 田内孝明・山口光昭・橋本トシ・中村昭子・中村悦子

調査協力者 下川達彌・立平 進 (県立美術博物館)・宮崎 貴夫の各氏より本書作成にあたって資料紹介を頂いた。

内業整理 黒川 弘子

遺物整理協力者 渡辺由里子 稲富千絵 末吉勢津子 古閑 徳子

## 本文目次

I 調査に至る経緯 .....	1
II 遺跡周辺の立地と環境 .....	1
III 調査 .....	2
1. 調査の概要 .....	2
2. 土層 .....	3
3. 遺構 .....	5
4. 遺物 .....	5
IV 復元 .....	10
V まとめ .....	10

## 挿図目次

第1図 琴ノ尾岳烽火台及び周辺 .....	1
第2図 琴ノ尾岳烽火台跡調査区 .....	2
第3図 烽火台の標高及び土層ライン (1/100) .....	3
第4図 土層 (1/40) .....	4
第5図 烽火台の構造 .....	6
第6図 坑口及び周辺図 (1/60) .....	7
第7図 東側焚き口 (1/40) .....	7
第8図 外郭 (1/60) .....	8
第9図 出土遺物 .....	9
第10図 藩政時代の大村藩及びその周辺の藩境 .....	11
第11図 長崎県内の烽火台跡 .....	12



## 表 目 次

表1 長崎県内の烽火台跡遺跡 .....	12
----------------------	----

## 図 版 目 次

図版1 遺跡遠景及び近景と調査 .....	13
図版2 琴ノ尾岳より大村湾と長崎を望む・琴ノ尾山烽火台跡 .....	14
図版3 烽火台の構造① .....	15
図版4 烽火台の構造② .....	16
図版5 烽火台の構造③ .....	17
図版6 烽火台の構造④と調査 .....	18
図版7 烽火台の構造⑤ .....	19
図版8 土層・遺物出土状況 .....	20
図版9 坑口内・外郭出土遺物 .....	21
図版10 復元 .....	22
図版11 復元 .....	23
図版12 復元終了 .....	24
図版13 烽火台の絵図面 .....	25

11 5

11 11 11



## I 調査に至る経緯

多良見町琴ノ尾岳周辺を環境整備して、地域住民が静かにくつろげる場、或いは自然やスポーツに親しみ心身の健康増進をはかる公園化計画が3ha 予定されていた。

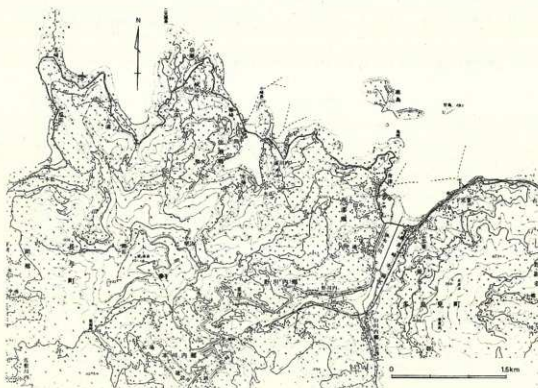
昭和62年度事業の公園化で琴ノ尾岳烽火台跡が含まれており、多良見町教育委員会より長崎県教育庁文化課へ調査依頼があった。

遺跡の取り扱いを、町教育委員会と県文化課との間で数回の協議を行った。これによって発掘調査を実施し、その後琴ノ尾岳公園の一郭に保存整備することとなった。

## II 遺跡周辺の立地と環境

遺跡は、町内の西側、長与町と境界を分ける琴ノ尾岳(451.35m)から40m程南側へ降りた斜面に残る。

所在地は、西彼杵郡多良見町佐瀬郷字竹野山1787-106他にある。周辺の表層地質は、複輝安山岩(大村安山岩)に覆われている。土壌は、琴ノ尾岳が乾性褐色森林土壌(常緑広葉樹が多く繁殖する)で、これを取り巻くように傾斜面にミカン園が広がる。(第1図)。



第1図 琴ノ尾岳烽火台及び周辺

### Ⅲ 調査

#### 1. 調査概要 (第2図)

調査は第一次と第二次に分けて実施し、また復元作業は調査終了後に行った。

##### 第一次調査

烽火台跡の現状は、周辺の木々の伐採は終了していたものの、雑草及び雑木の根が残り形状の予想が困難なほどであった。そのため、雑草の除去から作業を開始した。除去作業を終えると、烽火台本体石垣の崩落が激しく、遺構自体どこまで残っているか、判然としない状況であった。

調査区は、実測用の割り付け設定と、外周に散乱する石材整理のスペースを確保することから行った。これは、調査後復元のための石材として利用するためである。次に、焚き口が一か所確認できるだけ他に複数の焚き口があるものと推察された。そのため、坑口内部の堆積土を掘り下げた。その結果、他に2か所焚き口を検出した。次に、焚き口外部火入道の構造調査を行った。また、土盛部の構造確認のため、東西ラインで土層の確認を行うと同時に、土盛部外周に築かれた石垣の調査も行った。最後に烽火台と外部を区画する外周の石垣の整備に入ることにした。しかし、この外郭部西側上面に石材の崩落が最も集中して、石材かたづけ作業の間に台風5号の影響で天候不順が続き、7月18日で調査を一旦中止した。

第二次調査は、8月20日から8月22日の間実測及び外郭上面に堆積する石材整理で終了した。

復元整備は、10月5日から10月7日の間にはは終了した。



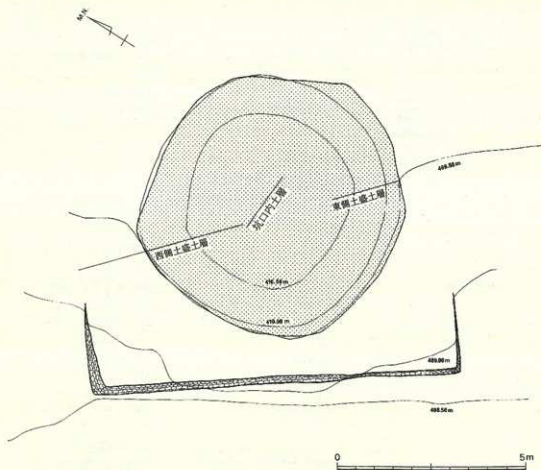
第2図 琴ノ尾岳烽火台跡調査区

## 2. 土層 (第3図・第4図)

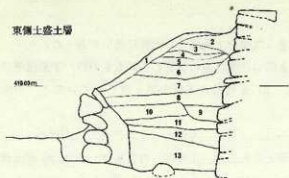
堆積状況は、坑口内部と坑口を取り巻く版築の土盛部とで内容に違いがあった。

まず、坑口外周を囲む版築の土は、上部の色調に違いが認められるものの、下部構造については、黄褐色粘質土を地山から 20 cm~40 cm 程積みあげ全周を巡らしていると、予想された。

坑口内部の土層は、坑口石垣下部から 25 cm 程地山を円形に掘り凹めて、内径約 1.4 m を測る。1層から3層までは、自然堆積と考えられるが、4層は、明黄褐色土が 80 cm 程西側から一挙に堆積した状況を示している。また、石材の重なりかたからも同様なことが言える。5層は、地山掘り込み上面に厚さ 3 cm 前後の炭化物が堆積していた。また、7層に一部小動物による攪乱があった。

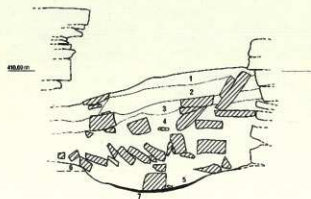


第3図 烽火台の標高及び土層ライン (1/100)



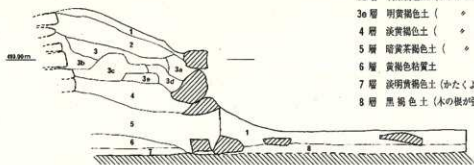
- 1層 表土
- 2層 暗茶褐色土 (サラサラする)
- 3層 暗褐色土
- 4層 暗黄褐色土 (粘質だみ)
- 5層 黄茶褐色土 ( \* )
- 6層 黄褐色土 ( \* )
- 7層 黄茶褐色土 ( \* )
- 8層 黄茶褐色土 (サラサラする)
- 9層 暗茶褐色土 ( \* )
- 10層 暗黄茶褐色土 (粘質だみ)
- 11層 黄茶褐色土 ( \* )
- 12層 黄茶褐色土 (サラサラする)
- 13層 暗茶褐色土 (粘質だみ)

坑口内土層



- 1層 表土
- 2層 暗黄褐色土 (サラッとする)
- 3層 暗黒黄褐色土 (しめりけをもつ)
- 4層 暗黄褐色土 (サラッとする)
- 5層 炭化物
- 6層 黒褐色土
- 7層 黄褐色土 (ちみつな粘質土)

西側土盛土層



- 1層 表土
- 2層 黄褐色土 (サラサラする)
- 3層 暗褐色土 ( \* )
- 3a層 茶褐色土 ( \* )
- 3b層 暗茶褐色土 ( \* )
- 3c層 黒褐色土 (カタク、コココクす)
- 3d層 明黄褐色土 (サラサラする)
- 3e層 明黄褐色土 ( \* )
- 4層 淡黄褐色土 ( \* )
- 5層 暗黄茶褐色土 ( \* )
- 6層 黄褐色粘質土
- 7層 淡明黄褐色土 (かたくよくしまる)
- 8層 黒褐色土 (木の根が張る)



第4図 土層 (1/40)

### 3. 遺 構 (第5図～第8図)

烽火台の構造は、4区画あり、①円筒形石積坑(坑口)、②土盛(版築)、③土盛を囲む石垣、④烽火台を囲する石垣外郭から構成されている。

#### ①円筒形石積坑(坑口)

円筒形の形状で、基礎部から上部にいくにしたがって口径がしだいに狭くなる。また、石積みは、平坦な石材を積み重ね、隙間に10～20cmの小角礫を充填している。口径2m、高さ2mが現存する。焚き口を3箇所設置し、坑口基部から1.5mの火入道を設けている。また、坑口基部には庇を付ける。坑口の石材は基礎となる部分に厚みのある角礫を使用し、上部に移行するにしたがって扁平な角礫を使用する。また、その礫の大きさは天井部の幅で、0.8m、基礎部の幅は、1.2mを測る。焚き口部は、幅0.4m、高さ0.7mを測る。

#### ②土盛(版築)

煙の拡散と坑口の保護が目的と考えられ、焚き口を除く全外周を取り囲む。また、土盛上面には大礫を坑口に向かって3箇所、平行に設置している。

#### ③土盛を囲む石垣

ほぼ、円形に土盛裾部から円礫を積み重ね、高さ1m、径7mを測る。石垣外底から3箇所に張り出しの石段を造る。長さ2.0m、幅0.3mを測り、これは坑口へ登る石段と考えられる。

#### ④石垣外郭

旧地形が斜面であったことが予想され、烽火台の基礎部を築く際水平面を作るため削平し、西側に段差がついたものと考えられる。そのため石垣外郭部が設置されたと考えられる。

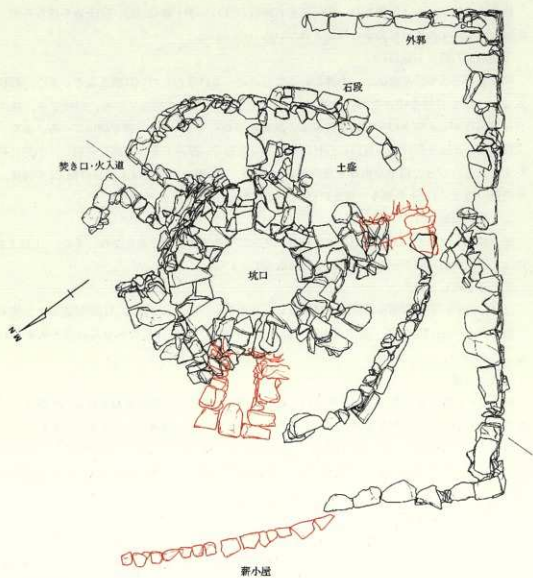
石垣はコの字形をとり、扁平な石材を長さ約10m、幅0.5m、高さ0.7mで築く。また南側と北側は、この石垣と直角にやや厚みのある石材を用いて、長さ4m、幅0.7mで配置している。

### 4. 遺 物 (第9図)

1は、波佐見系の染付長頸瓶である。口縁部、底部を欠く。頸部に二本の横線文があり、体部には、草花文を描く。器形及び特徴は、頸部から口縁部へは直線的に伸び、体部から内湾しながら底部へ移行する。胎土は暗灰色の緻密な素地を使用。

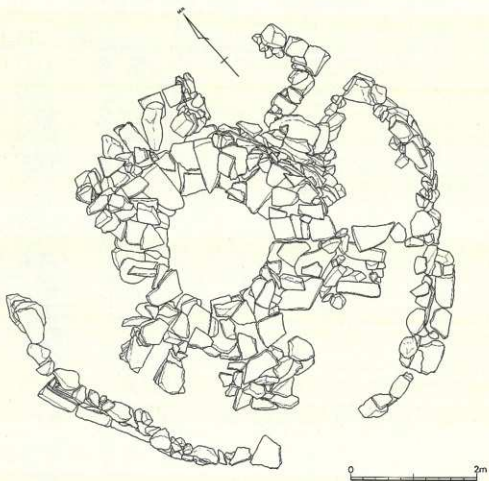
2は沈線のある扁平な石である。長さ32cm、幅26cm、厚さ5.2cmの三角形をした安山岩質の石材である。碁盤の目を作るように、縦に5本、横に6本引かれ、さらに左上から右下へ3本、右上から左下へ2本の沈線がある。

註1：沈線については、建物の礎石、あるいは烽火台の設計図、または遊び具等が考えられる。

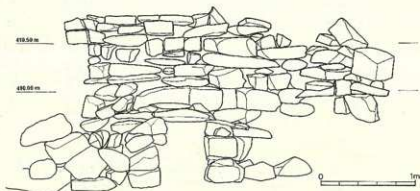


第5図 烽火台の構造

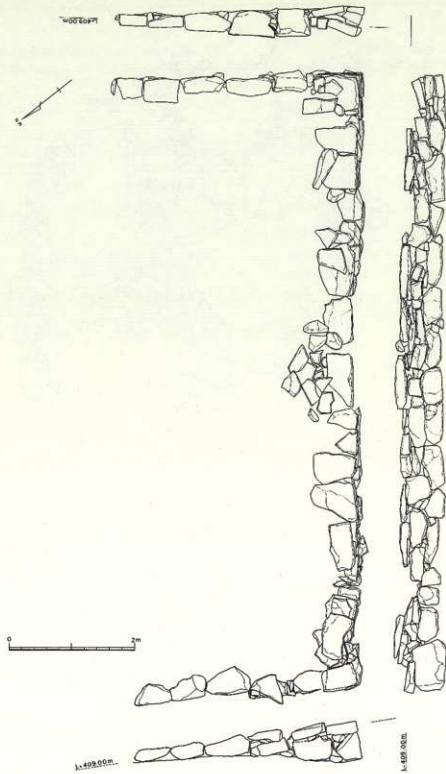




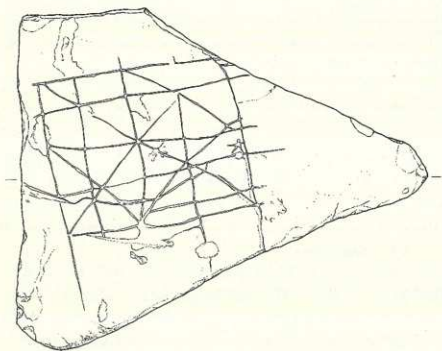
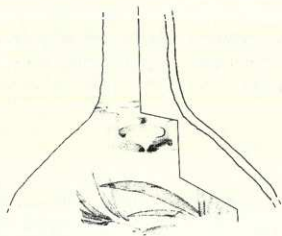
第6図 坑口及び周辺図 (1/60)



第7図 東側焚き口 (1/40)



第8图 外郭 (1/60)



第9圖 出土遺物 (1は1/2.2は1/3)

## IV 復元

琴ノ尾岳公園の一郭に復元して残すこととした。坑口内部石積みを漆喰いで充填し、調査時に取り除いた土盛を現状に戻し、土盛外縁の石垣を積み上げ漆喰で固めた。また、見学者の安全を考慮して、焚き口部分3箇所に、内外より格子を付けた。また、内部を見れるように階段を設置した。

## V まとめ

烽の制度は、古代律令時代の文献に現われる。『日本書紀』664年(天智3年)に「是歳、対馬島、壱岐島、筑紫国等に、防人と烽を置く」とあり、烽とは外敵に備えて警を報じ、これに関する制度は「軍防令」に11カ条の規定がある。『和名抄』に「烽燧、峯燧二音、度布比」とあるように、本来烽と燧があったことは「説文」にあり、烽は夜間に火をあげ、燧は白昼けむりをあげたもの<sup>(註2)</sup>と解される。

古代の烽については「羽白目遺跡」の調査で詳細な記述があり参考されたい。

さて、古代より行われてきた伝達方法を徳川幕府は島原天草の乱平定後、復活させ寛永15年警報伝達機関として、長崎及び近郊諸藩に烽火台の設置を命じた。

長崎から発した「狼煙」は、正保4年(1647)にポルトガル船2隻来港のおり最初に使用されている。この時、幕府の軍勢は九州・四国より5万人、兵船1,500隻以上が長崎警備にあたった。その後、文化5年(1808)に英国艦フェートン号が長崎港に侵入、この時佐賀藩が警備を怠り、なんらの抵抗もなく検視付蘭館書記2名を拉致する。この責めを負い長崎奉行松平因書頭自殺する。これを契機に、途中廃止されていた烽火山番所を再興し、翌文化6年(1809)1月20日に長崎の烽火山より「狼煙」の打ち上げを試みる。しかし、隣藩との連絡がうまく行かず、4月2日再びテストしている。その後「狼煙」は、文化12年10月廃止している。以上が長崎烽火山の「狼煙」の経過である。

江戸時代の多良見町琴ノ尾岳は、大村領<sup>(註6)</sup>に属し『大村郷村記』(1856~1862年編纂)では壱岐力村の狼煙場蹟之事に「長崎異変の節、長崎烽火山の狼煙此嶽にて請罷、此火平戸鐘崎へ通する定めなり、然共試之に曇天且雲霧深き時分ハ、此狼煙分明に通し兼ね故、文化六年平戸よりの相談に依て、長崎府司に達し止之、飛脚を以通するよふに極るなる」とある。(第10図)

これにより今回調査した烽火台の使用下限は文化6年まで、炭化物の堆積では、5層に3cm程が残っていることから、少なくとも一回は使用されたと言える。

最後に、現在周知されている古代及び近世の長崎県内烽火台を参考までに転記して、この稿を終えたい。(第11図・表1)。

註2：『上代烽燧考』 滝川政次郎著

註3：鍋島・深堀・諫早・大村・島原・平戸・福江・巖原

註4：鍋島(佐賀)・黒田(福岡) 藩が隔年長崎港の警備にあたる。

註5：明和元年(1764)に烽火山番所中止する。

註6：『長崎県史・藩政編』「大村藩領地図」長崎県史編集委員会古川弘文館、昭和48年発行。

#### 参考文献

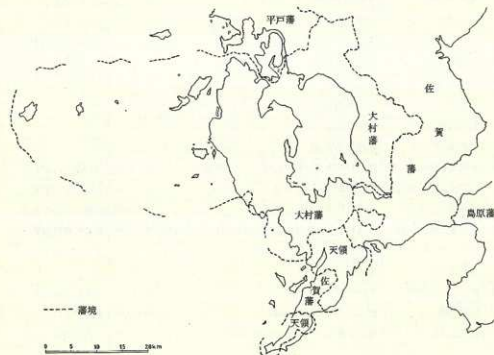
『日本考古学・古代史論集』「古代の烽とその遺跡」高橋富雄著・伊藤信雄教授還暦記念会編古川弘文館、昭和49年。

『長崎市史年表』長崎市史年表編さん委員会・長崎市役所、昭和56年。

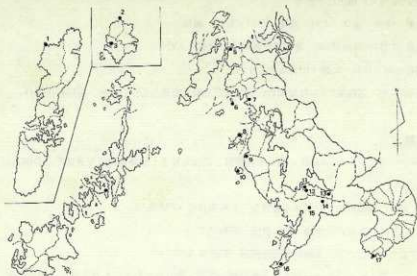
『幕府時代の長崎』長崎市役所編・臨川書店、昭和48年。

『長崎諸官公衛及付近之図』長崎県立図書館蔵(作成年月日不詳)。

『浜の館』一阿蘇大宮司居館跡一熊本県文化財調査報告・第21集・熊本県教育委員会、昭和52年。



第10図 藩政時代のオムラ藩及びその周辺の藩境



第11図 長崎県内の烽火台跡

表1 長崎県内の烽火台跡遺跡

No	名 称	所 在 地	時 代	文 献
1	烽火台の跡	上県郡上原町佐調千俣町	古 墳	長崎県遺跡調査カード
2	若宮島烽火台跡	壱岐郡藤本町東触	近 世	長崎県遺跡調査カード
3	火立場跡烽火台跡	壱岐郡藤本町本宮南触	近 世	長崎県遺跡調査カード
4	奈留町烽火台	北松浦郡奈留町		
5	日ノ岳烽火台	北松浦郡田平町		
6	高島烽火台	佐世保市高島		
7	相ノ浦烽火台	佐世保市相ノ浦		
8	大島烽火台	西彼杵郡大島町		
9	高帆の狼煙場	西彼杵郡大瀬戸町多以良	近 世	長崎県遺跡調査カード
10	松島遠見岳狼煙場跡	西彼杵郡大瀬戸町松島	近 世	長崎県遺跡調査カード
11	琴ノ尾山烽火台跡	西彼杵郡多良見町佐瀬郷	近 世	長崎県遺跡調査カード
12	琴ノ尾岳烽火台跡	西彼杵郡多良見町佐瀬郷字竹野山1787 - 106他	近 世	長崎県遺跡調査カード
13	キビノ尾烽火台	西彼杵郡多良見町キビノ尾		多良見町郷土誌
14	長崎烽火台	長崎市		
15	烽火山のかま跡	長崎市喚滝町	近 世	長崎県遺跡調査カード
16	船岬狼煙台跡	西彼杵郡野母崎町臨岬井上	中・近世	長崎県遺跡調査カード
17	烽火山遺跡	南高来郡口ノ津町早崎町烽火山	近 世	長崎県遺跡調査カード

圖 版







遠景



近景



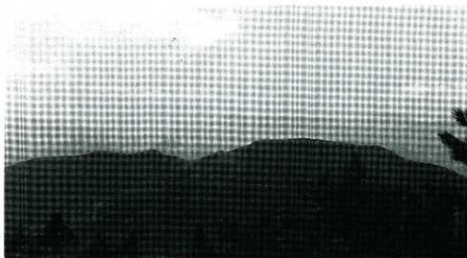
調査



琴ノ尾岳より大村湾を望む



琴ノ尾山烽火台跡



琴ノ尾岳より長輪方面を望む



烽火台全景



烽火台側面（西より）

東側土盛土層

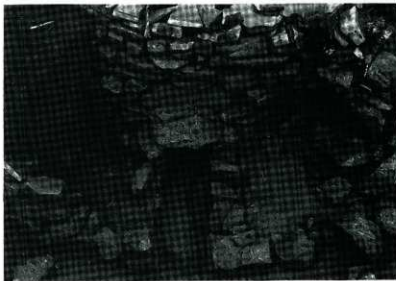
烽火台の構造①



土盛上面の大礫と階段



外郭



焚き口（東より）

烽火台の構造 ②



東側焚き口



北側焚き口



東側焚き口内部

烽火台の構造③



外郭西側



外郭西側



調査

烽火台の構造④と調査



焚き口内部南



焚き口内部北



焚き口内部東



坑口内部炭化物検出状況

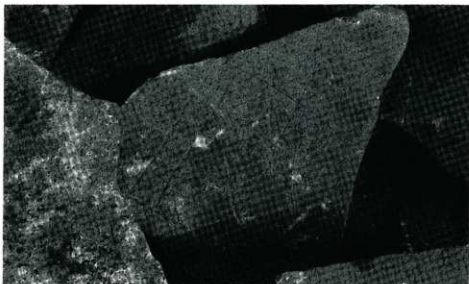
烽火台の構造⑤



坑口内土層

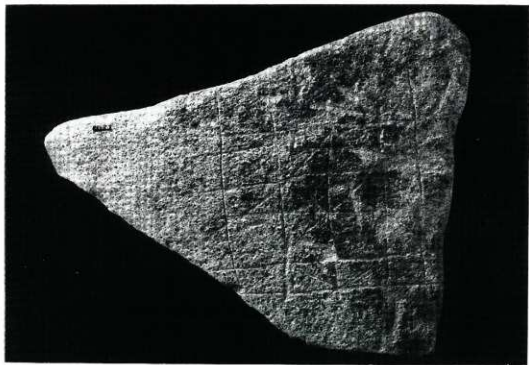
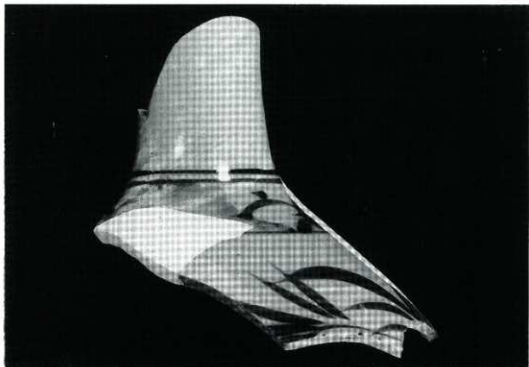


坑口内遺物出土状況



外郭出土遺物





坑口内・外郭出土遺物



焚き口北



復元作業



復元作業



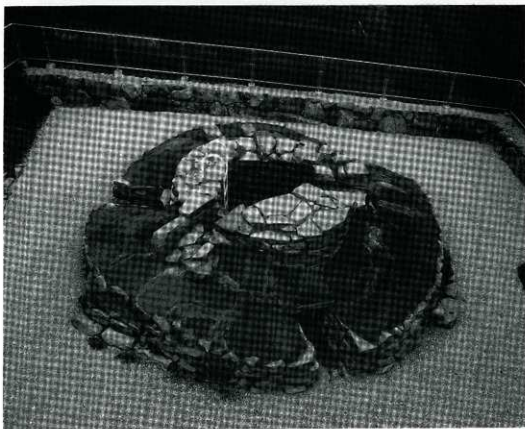
焚き口南



復元作業

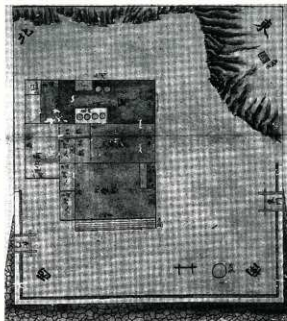


坑口内部の階段設置

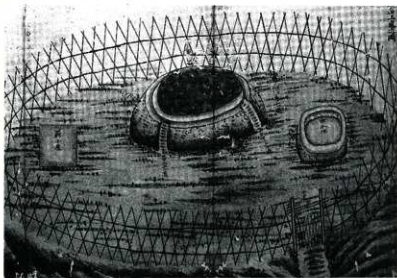


復元終了

烽火山のかま跡位置図の絵図面  
(長崎市鳴滝)



番所絵図



烽火山のかま跡 (長崎市鳴滝)

烽火台の絵図面 (長崎諸官公衛及付近之図より)



多良見町文化財調査報告書 第6集

平成元年3月31日

発行 多良見町教育委員会

西彼杵郡多良見町化屋名1800番地

印刷 (有) エスケイ印刷

佐世保市山瀬町19-13

長崎市宝栄町18-15

